

(新装の密研の大玄関—左はし図書館)

# 密教研究所に

—永年待望の密教文化研究所が、昨年末、高野山大学図書館横に立派に完成した。学究はじめ宗団人の喜びは大きい、世界の目は、科学のみの追求では、

科学がいかんが発展しても、密教の思想や哲理は、いやましに実証され、光彩陸離たるものである信念のもとに、現代人の思想的よりどころを、密教の中から汲みとらせることに役立つ仕事を始めて欲しい。

密教ブームは、ただ袖手傍観して待っていたって起らない。密教を現代に生かせる運動をまず起こさなくては起らない。

密教美術が高く評価されつつある今日、美術を通して、現代人の密教の精神や哲理を、懇切丁寧に知らせるキッカケを作る出版なども、明らかに、密教を現代に生かせる働らきの一つとなる。

以上が大体の現況のようである。そこで私のまず期待したいことは、修士過程、博士過程（これは未認可）大学院生などの城として、こうした若い生徒が、この研究所を働らき場所として、学術の蘊奥を究めるとともに、その学術を、現代の社会に実証的に生かせる研究や出版を活性化させる新運動を起す原動力となつて欲しいと思う。



亀山久雄

## 密研の青写真

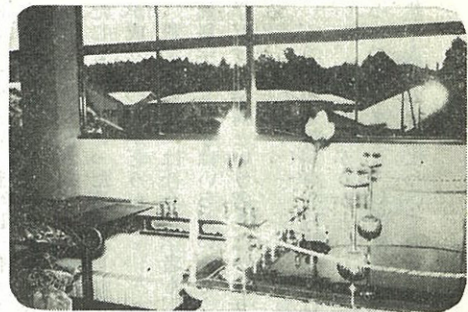
松長有慶

旧蔵、密教文化研究所の新築工事が完成した。十月に落成した校舎、体育館に備計画は、当初の目的を一応達成したといつてよい。大学構内の面目は一新した。

開創法会の終了後、宗門の人材養成を第一に掲げた新内局が、学園の整備、拡充をはじめて打ち出したとき、正直にいつてそれほど期待していたわけではなかった。はなばなし

# 期待するもの

社会平和と人間の幸福は得られず、精神面開発のため、密教への関心が深まっている時、この研究所に期待されるものも大である。



(2階大学院事相教室—本館など望む)

## 密教ブームに備えて

密教文化研究所の活動に期待す

亀山久雄



「高野山大学へイもなし」とかつて言われた、その高野山大学の拡充と整備が、

更に大学構内が拡張されて、五軒長家跡幼稚園跡など、きれいなサッパリと整理されて、表校門が西側金剛峰寺側に変更されて、草摺総長好みの寄贈で堂々たる石柱門が建てられ、金属による厳然たる玉垣ができ

宗団あげての壮挙になった賜ものもあるわけで、宗団の財政に大きな圧迫も危機もたらさずに、こうした画期的事業が完成されたということとは、何としても欲こぼしいこと

大師のお膝もとに招かれて、大師とともに生き、大円鏡智の心眼の開けた真言教徒を一人でも多く抱擁することが、真言教団の消長の運命を決することを、宗団人は認識して欲しいものである。

新設体育館も、規模は小さいが、明るくてスマートで近代的、下界の学校にも決してヒケをとらない立派なものである。

次に密教文化研究所が、図書館横き右側に完成、最高学府高野山大学の「名実」ともに整う秋が来たことは同慶に堪えない。これで若し、空から俯かんしたら隣接の小学校々舎や公民館までも、大学の構内に見えて、大学の尊厳いや増したという

さて一応、外容と設備が整ったとしたら、次は大学の第一義的な内容の充実と向上を期待するとともに、学術の振興と研究の活性化ということになるであろう。

さて問題を絞って、密教研究所の新築完成を機会に、期待する愚見に及ぼう。

新設グラウンドも、かなり広く整地され、野球も庭球もできるようなった。但し学園から二、三キロ隔てた鷲谷にあり、一寸不歩かも知れぬ。しかし将来この地に中学校も移転するし、団地も続々建つたりして、相当民家も増しつ々あるので、スポーツセンターとして発展する可能性もあり、活発に利用されるであろうし大学のグラウンドとして、一つの威力ともなるであろう。

草摺宗務総長の「命をかけても」の悲願実現は永遠に銘記されるであろう。なお稲葉学監の不言実行型の政治力と経営手腕も、永久に称賛されるであろう。

「人材の養成」を叫びつつ、わが息子は地方の学校へ入れるという根性では、宗団の人材陣を実現することはできない。

現在着手されているのは「密教大辞典」の編纂事業である。これはなお六、七年はかかる大事業で、各方面からも期待要望されているものだが、それも潤沢ではなさそうである。

平易な密教思想の人生哲学、人生知識、人間観など、大師の宗教の根本的なものを、続々と出版する可能性の展開を期待してやまない。

密教ブーム到来に備えて、密教の現代化、普及化をめざし、科学万能機械尊重主義で、荒唐の一途をたどりつつある、現代文化に、道義高揚と、精神文化の並進に貢献する密教センターの確立をこそ念願してやまない。

密教文化研究所の活動の具体的な構想と企画については、宗団、そして学園にいくつものデッサンが用意されている。また宗団の各方面からいまままでいろいろな形で、希望とか期待とかが披露された。新しい年を迎えるにあたって、わたくしもまた、新しく発足した密教文化研究所の将来の進路について、ささやかながら青写真の一枚もえがいてみたいと思う。

究所のそれぞれに細分化され、特殊化されてゆく。それとともに、大学はとくに教育の場としての性格を強化する。このような傾向は戦後とくに顕著になってきた。

高野山大学の場合も事情は同様である。いやむしろ宗門大学の場合には戦前からすでに子弟教育の場としての性格を強くもってきている。宗門が高野山大学を経営している第一の目的もまた、真言宗の教師、寺院住職にふさわしい人材を養成する点にあることはいうまでもない。

大学の三種の機能は、本来一つの大学のなかに兼ねそなえられることが望ましい。しかしこれらをとことくとくそなえることは理想ではあっても、現実には不可能なことである。ことに学生数が急激に増大し、研究領域が極端に細分化され、徒弟制度のな学者養成体制が消滅した現在、三種の機能を一つの大学の機構のなかにたくみに鼎立させようとしたら、それは神わざに近い。

これらの機能を一つの組織のなかに兼ねそなえることが不可能であるとすれば、残された方法は二つしかない。別個に三種の分身をもち、しかもそれらに有機的に結合させる組織をあらたに作りだすか、あるいはまたそのなかの一つの機能のみを果すことに満足するか、そのいずれかである。

一流といわれる大学はすべて第一の道を選び、二流三流の新設大学のほとんどは第二の道を進んでいる。豊かでない財政規模のなかで運営される高野山大学は、好むと好まざるから。

新しい建築をもって再出発した密教文化研究所に対して、いろいろな期待と要望を並べた。どの点をとってみても、さしあたり実現の不可能な問題はない。以上のような計画がすべて実現されてはじめて、密教文化研究所は生きてこよう。その設立の意義もある。

ただ大きな問題がまだ論ぜられずに残っている。すなわち、この密教文化研究所の諸事業を遂行するための経済的な裏づけと、それを支えてゆく人材の問題である。これらの二点が実は最も困難な問題なかも知れない。経済的な裏づけについてはわたくしの論すべき領域ではない。密教文化研究所に対する宗門人の関心と意欲と熱意にすべてはかかって

いる。大学ならびに密教文化研究所の将来にとって、経済問題以上に憂慮すべきことは、人材の問題である。大学ないし研究所が将来、万が一にも存続が不可能な事態にたちいたるとすれば、その原因は経済問題よりもむしろ人材の問題であると、わたしは考えている。ここ十数年間、大学の卒業生のうちから、学問を志す人間が、出てこなかったという名譽ある記録をもつ大学は、おそらくわが大学においては他にはなからう。かくして伝統ある高野山大学の密教科と仏教科には、来年になれば確実に二十代から三十代にかけての若手学者は一人もみあたらずなくなってしまう。いまは紙幅がない。いずれ機会があればこ

るとにかかわらず、第二の道歩んできた。そして高野山大学の未来図も、なかばあきらめの気持をもったので、その延長線上にえがいてきたものである。

ここに、宗門当局が、密教研究所の新築充実と、大学院の博士コース設置に踏みきったことは、宗門が真言宗僧侶の教育のみならず、密教の研究と、密教学者の養成にも、積極的に関心を示しはじめた兆候とみてよい。宗門の学園に對するこのような基本的な姿勢の転換は、高野山学園の八十有余年の歴史のなかで、画期的な意味をもつものともいえよう。

研究所が目的とするものは、まず第一に基礎的な研究の充実において他にない。ついでその基礎研究の成果にたつて、それを応用した実用化する点にある。宗門人が大学に期待する役割のうち、子弟の教育を除いたそのほとんど大部分は、この密教の応用面、実用面であるといつてよい。すなわち、密教のわかりやすい解説、紹介、密教經典および祖典の現代語訳等々がそれである。これら密教の実用面は、主として密教文化研究所の仕事として継承されるものである。現実にはすでに密教大辭典の編纂事業は昨年度に発足し、執筆準備が着々ととのえられつつある。そのほか、わかりやすい密教解説シリーズの出版などが、逐次計画されようとしていく。また密教經典、儀軌、祖典の英独仏語などへの翻訳事業も、やがて着手されねばならない。

の問題のみについて書き、心ある方がたに訴えたいと思つている。このような意味においても、後継者養成を目的とする大学院の博士課程の新設の意義は大きい。

新しく発足した密教文化研究所

### 若者に大きな夢

作州 牢人

近年宗祖大師の教理が宗団内にとどまらず、宗団外の人々にも広く紹介されている事実は極めて大きい意義をもつものであり、戦後の宗門教育の混乱もようやくして落ち着きを得るようになったかと思つると一入感慨が深い。加えて先年十月には臨時宗会が開催され、母校高野山大学拡充整備案が通過、時を移さず大学附属の密教文化研究所が新たに建設されるなど、ともかくも一つの方向を定めた現内局の積極的な姿勢は極めて意欲的であり、又それに惜みない援助を続けた宗門単細胞の熱意は若者に大きな夢を与えて充分である。

更にこれに加えて母校に学ぶ後輩に奨学金の提供を決議した高野山住職会の態度は甚だ示唆にとむ。昨年一年にみられたこれら一連の教育への愛情は、大学も又ようやく敬の念をもって取扱われるようになった証左とも、あるいは又、七十年の放任の過去から栄光と繁栄の未来への転換とも解釈されてまことに喜

ほとんどの宗門大学の付属研究所には、二三年の海外出張を終えた宗学と語学のエキスパートが、少なくとも一人はかならずいる。この人たちが中心となって、祖典の外国語訳が着々と進められ、最近あちこちの大学で、かなりの成果があげられはじめた。この点、残念ながら高野山大学ははるかにその後塵を拜している。

以上のような密教の紹介、解説の仕事とともに、密教と実社会との接触を意図する企画をもつことも、密教文化研究所の重要な仕事の一つであらう。密教をいかにして現代社会に適應せしめるか、さらに密教のいかなる点を将来の社会の指導原理として生かすべきであるか、真言宗門の歩むべき方向は如何、など密教文化研究所で検討されるべき問題はきわめて多い。

そして、これら密教の現実社会への適用問題の討議には、宗門の学者のみならず、真言宗出身の一般の学者、寺院住職の代表者、第一線の布道家、さらに思いきつて宗団外の密教に関心をもつ人びとの参加が是非必要とならう。これらバラエティにとんだ人びとが、建設的な見解を卒直に発表し、たがいに意見をたたかわし、検討する場を提供するの

も、密教文化研究所の役割の一つにかぞえられる。その結論を尊重して、ただちに宗教とか檀信徒の教化に生かすか、それとも無関心にみすごし無視し去るか、それは宗門人の態度いかんにかかっていることはいうまでもない。

と、ようやくこれから誕生を迎えようとしていた大学院の博士課程に対して、宗門の方がたのあたたかい御理解と、実のある御後援を心からお願ひして筆をおく。  
(高野山大学助教・五之室佳)

ばしい限りである。このような微候を背景にして「密教文化研究所」のビジョンを描くことが許されるなら、何といつても世界に誇る純粋学問上の文字通り「密教文化研究所」に成長して欲しいことにいつている。

国立私立をとわず「研究所」と名のつく機関は恐らくは人文科学系だけでも駅弁大学に等しい程多数あるに相違ない。しかし、その中でも長い伝統と格調高い実績を誇り得る「研究所」といへば、東洋文庫、東大史料編纂所、京大人文学研究所等

わすかを指摘し得るにとどまる。それらに累積された学術的成果は秀れた人材と豊かな環境に恵まれて、水準も高く、密度も濃い。大学附属の「密教文化研究所」もそのような日本屈指の研究所になる事こそ、宗門人の期待の全てが託されている。豊富な費用と優秀な研究者に組織されたのった果実は常に宗門単細胞及び檀信徒にまでむだなく吸収され、血となり肉となる。「事相」という一つを考へても、研究所に質せば、時代即応した一つの真理とまで高

みよう。十八世紀以来、ヨーロッパ人によってインド史の研究が始まった。それはただ格好の植民地として、未開拓の搾取の対象であったから。その結果、ヨーロッパ人的なインド観が世界に定着した。そのようになゆがめられたインド観を払拭し、インド人によるインド観を確立するために、独立後のインド政府と、インド人学者がどれほど努力を払ったことであらうか。外国人の一方的な研究のみに依存しているのは、ナンシナリズムもおこりようがないからである。それでもなお、世界の常識としては、ヨーロッパ人のインド観が一般に通用している。

密教文化研究所を国際的な密教文化研究センターにしようとする企画のあることも聞いている。外国人学者がここをおとすれ、研究所員とともに密教を研究するすがたをみる日もあることであらう。その場合、基礎研究はすべて他人まかせで、応用面、実用面のみに研究者の関心が奪われているとしたら、訪れた人たちの失望をかうことはわかりきっている。

定期的な研究紀要の出版、それは密教文化研究所が国際的に認められるための、最低にして不可欠の条件である。密教関係のすぐれた学術論文が数多く英独仏いずれかの言語で公表されるならば、高野山大学の密教文化研究所に、そして密教に、世界の目が注がれることにならう。現在、海外の東洋学者は大なり小なり密教に関心をもち、密教に研究意欲をもやしはじめている時期なのであ

められた実際の解答を得ることができる。しかるにそのような期待は単細胞(寺院)―子弟教育―学園―宗費に象徴される我宗の教養体制を反省する時、あまりにも空しいものである。事に誰しも容易に気付くに違いない。それなりの理由もあらうが、今日までの教養体制においては、学園は宗門単細胞に還元される成果を怠り―当局はかけ声ばかりで―単細胞は宗費すら完納できない―といった如き悪癖をくり返して来た。そこに指摘される堆積した多年の弊害は、わずか一年の成果で消散し得るほど底の浅い単純なものではない。今日までそれらを改善すべく教育蘇生への対策は、度々論じられ、実行もされなかったが、全ては確たる実績を見ぬまいますかにか消え去ってしまった―、最も基本的な教養基

金なるものも、透明な宗門人と密着したものに成長していない事も周知の如くである。このような歴史をとらえて、先年高橋宗会議長は「細々ながら」と祝意を表されたが、陽の当らなかつた大学を形容してまことに當を得た言葉であったと思う。そうしてそのような表現が一層生々しく響くのはそこに学び、そこで思索し、そこで成長したわが母校であるためかも知れない。

恐らく高野山大学の卒業生は等しくその言葉のもつ深い味合いを、単なる悲劇によせる感傷としてではなく、大学八十年の過去をこく素直にとらえた至言として抵抗なく受けと

めることができるであらう。このような悪循環の過去にうら打ちされた教養体制においては、宗門人のよほど確たる方向づけが明示されぬ限り、新研究所の未来も手ばなしで喜び得るほど安直なものではない。かえって、新居をもった重圧にたえかねて研究所も又大学と同じ運命を辿るのではないかと秘かに憂慮するものである。わが宗門は未だ百年の大計をもつて教養体制を積極的に支援する程成熟していないことはもちろん、教学危機の意識も極めて稀薄なのである。

現行法の公選制は宗門人一人一人が宗門の単細胞であるという自覚をもって、管座公選に参加ができる宗門再生への一つの過程であった。しかるに現実には周知の如く、怪文書の乱舞、票の買収、地域的ボスの暗躍等々、社会を指導する僧侶としては少しく恥すべき行為ではなかつたろうか。結局、金力の差が勝敗を決し、選挙とはこんなものだとなしに正当化して、多少の行き過ぎは反省しながらも、創価学会の真言宗攻撃の材料になったら困るとか、週刊誌ダネになつて大師信仰に悪影響はととか、自衛の手段は懸念され

そこには宗門子弟の反応など考えてもみない。対社会的な現実の自衛も大事だが、むしろ内部の青少年下

部構造への配慮の方が重要視されねばなるまい。宗団を前進させるためにも「研究所」を充実せしめるためにも、残された方策は大師信仰を根底にもつた若者の層の厚さ以外に道はないからである。

単細胞の全てがそうであるとは言い難いけれど、管座選におけるかような愚僧的あり方と、散技の上げ下げの重要性を強調する賢僧的行為とは、あい矛盾してはいまいか。むしろ若者が尊敬する理想の僧は、讀のユリに卓越せる僧ではなくして、管座公選に清らかな投票をし得た僧侶にある事を進言したい。何故なら、今日の若者のもつ魅力の一つは、合理性にあり、対社会に指導力をもたぬ僧、ひいては職業としての僧侶には意義を感じないからである。

更にもう一つ引用して、宗団蘇生への警鐘としたい。

それは昨年未の報道で耳新しい英国のポンド切り下げ政策である。この経済政策は切迫した財政の窮余の一策と解説されているが、かつて七つの大海を支配した大英帝国の斜陽への階段でもあった。そうして、その原因は新鮮な活力湧れる世代の抬頭を吸収し得なかつた「身分制度」の虚飾に由来している。英国民間に長年にわたって培われた貴族の子は貴族に、靴屋の子は靴屋にという身分制度の壁は、いつの間にか能力と無関係の人間を育てることになり、有能な人材を拒否する結果となつてしまった。やがてその影響はあらゆる社会構造の硬直化を迎え、経済面

においては止むなくポンド切り下げ政策をとらざるを得なくなり、英国の衰運を象徴するのである。これは吾宗沈滞の様相と酷似してはいないか。もつて他山の石とすべきである。

いたずらに危機感や悲観論をふりまくつもりはない。ただ、宗団がどこまでも安易な姿勢を排して、真剣に教学体制づくりに打ち込んでほしいのである。

もはやこのような宗団指導者僧への発言はやめて、課題である「密教文化研究所」への期待を綴らねばなるまい。だが現実を考慮してみた場合、筆の速度が落ちるのも確かである。

ともかく私共宗団はここに新居の研究所をもち、その運営と方向に責任の一端を荷ったわけであるから、思いを新たにめぐらせることにしよう。

まず「研究所」育成の直接的基盤は建物ではなく、費用と人材であることはいうまでもない。まず人材についてみると、その土壌となる大学においては、大多数が信仰心に関係なく、もちろん僧侶に魅力を感じないまま、両親や周囲から説得されて、止むなく宗門の大学に入った者で占められている。これが若者にとつて僧侶がもつ魅力であるとか、あるいは学生時代の成績いかによつて骨をうめる寺院が決まるといふのなら、もつと向学心も湧き、闘志も横溢するのであるが、彼等にとつて、卒業後の就職先は確保さ

れているから、そこには「克己」という場が要求されない。曲解にすぎるかも知れぬが、宗門に学ぶ彼等は高野山大学を撰んだ時点において、勤勉という若者の特権を自からの手で放棄してしまつたのである。といったらそれはあまりに冷酷に過ぎるであろうか。彼等をしてただ単に血のつながりがあるということ、人生の方向を強要し、宗門の繁栄を退歩せしめる指導層にも問題はあ

る。歩を喪失した彼等にも問題はある。牢人をして言わさしめれば、若者の青春をかけるのでもなく、ただ安易に青年時代を過すのなら、近代青年は須くしっかりと自分を主張し得るようには教育されているのだから、両親の悲哀に義理だてなどせず、新しい信仰心をもつた人材に継承権を委ねた方が、ずっと世の中のためになる。勿論、自活という事を条件にして。

これが大学の現実であらう、しかもこの傾向は一層きびしいものになるであらう。

費用についても人材と同様さみしい限りである。宗門の単細胞は敗戦によつて、経済的基盤の多くを失つてしまひ、その影響は学園経営に殆んどが費やされる宗費すら完納されない実状であるから、ここに言費を費すまでもないであらう。費用のみならず、人材もこのように枯渇している現実にあつて、一体「研究所」の未来に何を期待できるであらうか。

密教研究所が真言教学研究に大きな躍進をもたらす源泉となりうることは疑わないのであるが、いわゆる象牙の塔となつて没社会的・没大衆的な在り方を辿るような方向に進まず、大衆と末派寺院との関係を密接にして真言教学を宣揚する方向に進むことを切望するものである。それは仏教の主旨が学問的研究に終始することなく衆生教化が目的であることと、末派寺院の要求を第一に考えて、それに答えてほしい。現在密教が観光的価値は有るが、その本質は大衆に理解されず、また末派寺院の人々にもよくわかつていないであらう。

# 現代に生きた権威を

田口義孝

密教が幾人かの少数の僧侶、学者に理解されているだけで多数の者からは離れた状態にあるため、これを近づけることを目標にしてその方法を研究し、その内容の高揚に努力してほしいと考える。教学の研究・整理も必要であるが、大いに外に向つて真言教学をやさしく、わかり易い方法で流出する方法の研究であつてほしい。末派寺院の者がわからないところは、研究所へ連絡すれば親切に教えてくれるところであらう。末派寺院は毎日の経済生活に忙しく勤務者が多いために費す時間が極めて少ない。檀家の人々も同様に布教を行うからと言っても集ま

くる者は極めて少なく、葬式、供養の折を利用して教化をする程度である。その折に行う布教の良い木がほしいのである。本山布教師の立派な大部の本があり非常参考になり、大いに受益するところがあり、世相、人々に果して受け入れられるだけの内容があるかということになる。誠に不十分なところが多いという事です。それは若い人々合理的、科学的学問の上に育成されているから、当方もそのような立場において布教を進めなければならぬ。残念であるが、これまでの書はこの点に欠けている。読んで飛躍を感じるのです。文獻的、考証的方法のもとに書き述べられていないのである。ゆえに研究所では科学的方法の上から布教に資する書を出版してほしい。具体的なことは末派寺院から希望を採ればよいのである。科学的、考証的方法でやさしく真言宗の諸経、論、事相などを書き改めて現代の中に真言教学を生かす必要があらう。弘法大師の深い教えも大師の難解な文章では読むに時間がかかりすぎる。「不易流行」を芭蕉は説いている。次にこの観的から真言教学の要点を抜き採って、それを言葉で吟じ易いように韻律的な文章で綴つた書物を切望する。密教を幼児のところから肌にしみ込ませる方法として

て、しかもそれが心の中に残る文となるものを研究してほしい。これは創作となるもので、いわば五七調とか、七五調とかといった方法で短文でよく、読んで心の全線に響くものであること。経を意識したものには韻律的な文はこれまでにない。この書物ができればと私は長い間考えて来た、幼児・児童の宗教教育にどれほど功を成すかわからないからである。これは子供が暗誦できるからである。この夢を描くような韻律的短文を集めた書物の編集、創作を大いに期待する。これまでいくつかはあつたであらうが、その訳文たるや誠に読んでリズムに欠けている。理趣経にしても楽しい夢が描かれていない。それは研究所で時間をかけて創作するに価しよう。われわれ地方寺院では心がけていても難用に追われてしまつたのであり、情けない思いである。

以上のように私は真言宗の諸経、論、また布教に必要な書物の研究出版を期待する。要するに研究所が現代と共に生きる方向に進んでほしいと期待する者である。それと同時に末派寺院の希望を十分に採用する方法を考えて地方寺院との密接な関係を保ち進むことが肝要である。そのためには金の問題。研究員の研究費の解決しなければならぬ。しかしこのことは別の問題である。そのことも地方寺院に計るのも一つの方法であらう。

われわれ地方寺院の者はそれが地方寺院の発展に、希望にそのもので

御題「川」によせて  
法眼 川原一晃  
元日や 河原の小石 まろやかに  
川がへだつ 凍の妹山 脊山雪  
川の音 春のリズムに添う時あり  
(勘山にて)

⑦宗団は優秀な人材を先ず大学院に入学せしめ、密教を勉学せしめる事。その間研究に適さないものが出た場合、責任をもつて他の機構に所属せしめる事。  
⑧豊かな費用である事が理想だが、極めて乏しいから、許される範囲内で研究しなければならぬ現実がある。しかし、これとても業績を累積すれば、近き将来に於いて、大学とは違つて自活の可能性も生ずる。その為には、先ず大学所属の諸先生方は一致団結して、一つのテーマを選び、各々の専門の範囲で成果を上げる事。  
⑨「密教文化」は規定方針通りに合併号など出さず、年四回必ず発刊する事。  
⑩撰んだテーマの成果については、最低限度の研究費と出版費とを、宗団は責任をもつて捻出する事。

- ①宗費を完納すること。
- ②僧侶及び僧侶の世界が対社会的のみならず、寺院の内部においても、若い世代から尊敬をうけること。
- ③僧侶という職業が魅力あるものにする事。
- ④自宗内の子弟全ては宗門の学園に学ばせること。
- ⑤以上は不可能であらう。
- ⑥宗門の学園以外に進学するもののリスト及び成績を宗団が掌握すること。
- ⑦地方の要職者は当局並に学園に他に進学したのものについて情報交換をする事。

- ⑧将来においては、研究所は大学とは別途の教授体系をもち、独自の成果の為に専念する事。
- ⑨宗団単細胞は費用のからぬ方法で協力出来ることもいろいろある。たとえば、真言宗に属しているお寺は大体創立年代もなく、各寺所蔵の資料も極めて豊富であるから、他の研究機関より、コピーや研究論文の寄贈を受ける機会も多い筈。それらをつとめて、密教文化研究所に寄贈をうけるよう指示すること。
- ⑩研究テーマは密教に限ること。
- ⑪所属研究者は真言宗のものに限ること。

あれは出費は惜しまないであらう。古典的方法に終始することはもうごめんである。

密教研究所で行うべきもの、未だ埋もれている幾多の経論、仏像などの紹介、整理、保存、管理の問題もあると思うが、地方各寺院の住職はそれぞれ布教、教化のことにつき

本山に多くの希望を託しているが、具体的に本山に実行を希望する機関もなく、またその組織もない状態である。あつても形式的なものである。あつても形式的なものであり、実現性が乏しい。研究所はこの辺の状況を汲んで現代的に生きた権威のあるものとなることを切望する。(群馬県太田市大字寺井・聖王寺主)

## 新春詠草

高橋 芳夫

「御題」「川」  
冬川に楮さらしていまもなほ紙漉  
き業をたもつふるさと

言葉つき吾れに似てきし未つ子が  
元旦にきて六人揃う  
歳末は床やに行く間なかりしと伸び  
しままなる髪撫でる子よ  
つかれから頭痛がすると寝し  
まのスポーツ刈りの子の髪見お  
り実社会にいててもまるる気づかれ  
か元旦一日ねむる良朋。

「追憶」  
四十五年の歳月たてばようやくに  
老いを高野に養はむとす  
少年の心に止めきやさしかりし物  
外和尚密雄和尚  
食事の偈われに言はしめ朝餉とり  
し物外和尚の白眉こほしも  
「今朝正食多水食」虫無しと応へ  
粥をまいらす

おりにふれて  
斎藤 よし子  
阿字観を学ぶ  
千万の私財を投げうち建て給ふ  
座禅道場今日落慶す  
座禅堂木の香も高く吸う息と  
はく息清し半眼のまま  
掌を組み静座の姿勢五分間  
指導のままに呼吸を数うる  
半伽座の下にはまるき蒲団あり  
座褥とよめる敷物を敷く  
(高野山高学院内)

天目の九谷茶碗に梅干入れ朝なう  
ましと酒はしたまふ  
青嵐居士にしぶ柿食せ光沢よきに  
迷ひたりなカラカラ笑ふ  
かりそめの因縁ならずと密雄和尚  
少年のわれに涙したまふ  
美味ものは一つ食べよとそのまま  
箸さしのべて口開かしむ  
密雄和尚うましうましとひとり言  
かたむけたまふ夕のうま酒  
(高野山小田原住)

おりにふれて  
斎藤 よし子  
阿字観を学ぶ  
千万の私財を投げうち建て給ふ  
座禅道場今日落慶す  
座禅堂木の香も高く吸う息と  
はく息清し半眼のまま  
掌を組み静座の姿勢五分間  
指導のままに呼吸を数うる  
半伽座の下にはまるき蒲団あり  
座褥とよめる敷物を敷く  
(高野山高学院内)

一、建築 成る

昨春秋、高次に増築校舎一棟と体育館とが落成した上に、十二月十日には大学院研究所と...



密教文化

研究所の運営と構想

所長 中野義照

殺されている。今半年位い時間をかき万端遺漏なき準備を完了し、実際に入りたいと考えている。...

人々も集るであろう。このように人々を自由に指導する学者を輩出していただくには、...

密教文化研究所は、今準備中のもの一つに鎌田親忠師の講義の結晶である中院流一流伝授一巻がある。...

もし経費が許せるようになる時は、研究所員は研究所で独立の生計費を得て研究する者でありたい。...

明日の教学への提言

稲谷祐宣



稲谷祐宣

教学のない宗教はない。またそれは時代と共に進まなければならない。宗団としては最もそれを力をつくす...

これは明らかである。しかもそれを行ったのは現代の僧侶よりはるかに...

このことは真言宗近代百年の歴史をたどることで明白である。先進国ヨーロッパのキリスト教会、その教育、教学、布教システムの研究調査を行ったことがあったであろうか。...

備を完成したいと思っている。只今申請中の博士課程がパスすれば、大学院生の収容予定は修士課程二十人、博士課程十八人計三十八名となるので、...

学は役に立たないと言われる。しかし、大学、および大学院は、本質的にはこれでよいと思う。...

次にも述べたように、自分の仕事としては新密教大辞典の編纂がある。この辞書には出来る限り広い範囲の密教を包括したいと思うので、古義真言の宗義事相はいうまでもなく、新義や真言律及び台密にも及ぼし、更にできるだけ多数の新しい資料を西蔵密教の方面から得たいと思うている。...

密教文化研究所は、今準備中のもの一つに鎌田親忠師の講義の結晶である中院流一流伝授一巻がある。これは師の原稿を先ず添田隆俊師が整理し、多年高野山時報に托せられたものであるが、更にこれを鎌田師に伝授を受けた高見寛忠師の筆記本を参照して再整理している、原稿が完成次第上梓する。...